

興福寺旧境内の調査(平城第625次)

興福寺は藤原不比等が奈良時代はじめに平城京左京三条七坊の地に建立した藤原氏の氏寺です。平安時代から江戸時代を通じて、たび重なる火災に遭いながらも再建を繰り返し、中金堂院を中心とする大伽藍を誇りました。興福寺では1998年に策定した「興福寺境内整備構想」にもとづき寺観の復元・整備を進めており、そのための発掘調査を奈良文化財研究所が実施してきました。今回、中金堂の北西に位置する鐘楼と、五重塔・東金堂を囲む東金堂院の西面および南面区画施設の規模と構造をあきらかにする発掘調査を実施しました。調査期間は7月1日から10月15日です。

鐘楼地区では基壇全体が良好に残存しており、創建時の規模や構造と、焼失再建の履歴を確認しました。基壇の規模は南北約15m、東西約11mで、礎を多く含む土で構築していますが、版築はおこなわれていません。基壇外装には平安時代、室町時代の再建に際して据え直された羽目石を確認しました。

基壇上には9基の礎石が当初の位置で残存します。長径1.0～1.9mで柱座等の造り出しはありません。礎石位置から、鐘楼の建物は桁行3間(約10.1m、34尺)、梁行2間(約6.5m、22尺)の規模で、柱間寸法は桁行が中央間12尺、両脇間11尺、梁行は11尺等間で、中金堂・講堂を挟んで東の対称位置にある経蔵と同規模でした。

特筆すべきは基壇上の四周をめぐる素掘溝(南北13.4m、東西10.1m、幅40～50cm、深さ30cm)を確認したことです。中世以降の興福寺を描いた絵図では鐘楼の下層部分が袴腰と呼ばれるスカート状の構造物で覆われていることから、こうした構造物の基礎が抜かれた痕跡と考えることができます。ところで、

興福寺の縁起や資財を伝える『興福寺流記』には、鐘楼の規模を経蔵と同規模とするいっぽう、同史料が引用する「宝字記」(天平宝字年間〔757～765〕)、「弘仁記」(弘仁年間〔810～824〕)には「長四丈六尺、広三丈五尺三寸」(それぞれ13.6m、10.4m)とする記述もあり、その意味するところが課題とされてきました。このひとまわり大きい規模は、今回検出した素掘溝の南北・東西長とほぼ一致します。これにより「宝字記」および「弘仁記」の記述は袴腰下端の平面規模を記したものと解釈できるようになります。袴腰付鐘楼は平安時代後期の法隆寺東院鐘楼が現存最古の例ですが、今回の調査により奈良時代にまで遡る可能性があることがわかりました。

東金堂院地区では、五重塔の前で門の礎石据付掘方あるいは抜取穴を検出し、東側の基壇外装も確認できました。門は、桁行3間(約8.6m、29尺)、梁行2間(約4.7m、16尺)の八脚門で、基壇の規模は南北約10.6m、東西約7.7mと推測できます。

門の下層では、古代に遡ると思われる東側の階段痕跡が新たに見つかりました。また、西面回廊や門は焼失と再建・改修を繰り返したようですが、室町時代の焼失以降は再建されなかったようです。

このほか、西面回廊と南面区画施設との取りつき部分では、南面区画施設にひらく穴門らしき礎石がみつかりました。また、その下層には古代に遡るとみられる石組溝を確認しており、今後、整理作業を通じて、その性格を詳しく検討していきます。

9月28日に新型コロナウイルス感染症対策をおこないつつ実施した鐘楼地区の現地見学会には、平日にも関わらず606名の方に参加いただきました。高い関心を寄せていただいたことに感謝いたします。

(都城発掘調査部 森先 一貴・和田 一之輔)



鐘楼地区の調査区全景(北西から)



東金堂院地区の調査区全景(東から)